

竪穴住居の類型と系譜

—長野県増野新切遺跡の分析—

櫛原 功 一

はじめに

I. 増野新切遺跡の集落研究史

II. 分析の視点と方法

III. 増野新切遺跡の竪穴住居の類型と分布

IV. 4本類型と6本類型のモデルとサイズ

V. 時期的にみた竪穴類型の分布と系譜

まとめ

はじめに

本稿では長野県南部、伊那谷の縄文中期後半の増野新切遺跡について、竪穴住居の柱穴配置をもとに集落の構造分析を行う。

縄文中期のいわゆる環状集落は、谷口康浩氏らが指摘するように複数の竪穴住居のまとまり（支群、小群）の集合体であり、竪穴住居群からなる支群は円周上の一定のエリアを分節的に占地するとともに（分節構造）、小群が複数まとまって2大群を構成する環状集落の事例がある（2大群構造）。支群内の個々の竪穴住居に着目すると、平面形、柱穴本数、主軸方向等に共通した傾向をもつことがある。

竪穴住居は建築から廃絶に至るまでの間、拡張、建て直し、廃棄後の利用にわたりライフヒストリーをもつことは小林謙一氏らの研究に詳しいが、集落が継続的、連続的に維持されたのであれば、各竪穴住居は点滅的に存在したのではなく、順送りの系譜性をもって変遷したといえ、竪穴住居間の系譜的関連性を明らかにする取り組みが必要となる。このような個々の竪穴住居の動きへの視点、すなわち「住まいの流れ」については、柱穴配置の類似性や炉石の移動などを根拠に水野正好氏が着目して以来、今日に至る集落論の中でたびたび登場する視点ではあるが、確証が得られないために推論にとどまることが多いように思われる。竪穴住居間の系譜性を紐解く材料を見出せなかったのである。

近年、一集落の竪穴住居の平面形や柱穴配置を重ね合せると、よく一致する事例が複数あることがわかった。つまり柱穴配置を重ねた時、柱穴配置の類似性が高い「酷似プラン」をもつ竪穴住居の類型（竪

穴類型）を一集落内で複数抽出できることから（重ね合せ法）、それらの時期的変遷や分布状況を探ることで、集落内での住まいの流れを明らかにできると考える。この現象については2004年に石井寛氏が横浜市原出口遺跡の4号住と7号住の酷似性について指摘し、上屋材の移動を想定することで、「柱穴構成の酷似性は住居址の同時存在を保障せず、むしろ時間差を示す材料になってしまう」という見方を示した（石井2004）。また2007年には長谷川豊氏が伊那谷の増野新切遺跡D14号住、伴野原遺跡33号住を木曾谷の太田垣外遺跡8号住の竪穴住居プランと重ね、「炉址の一端に基準をおいて同一スケールで重ね合せると、支柱穴配置がややずれるほかは、太田垣外遺跡8号住とよく一致する様子を示し、この3者が共通の設計仕様の配下で割り付けられていることを端的に物語っている」として、設計仕様の点からプランの酷似性に注目した（長谷川2007）。このように、プランの酷似性は上屋材の移設または設計仕様の同一性を示す現象として理解されている。

筆者は、これまで同じ柱穴本数の竪穴住居がまとまりをもつ事例や、小群がいくつかの柱穴類型のセット構成を呈する事例などから、柱穴配置をもとに環状集落の構造的分析を試案してきた。近年、酷似プランに着目し、住まいの動きを加味することで動態的な集落構造分析を東京都多摩ニュータウンNo.446B遺跡、同No.939遺跡、静岡県長泉町桜畑上遺跡について検討した（櫛原2016a・b）。

酷似プランの竪穴住居は、環状集落の同一小群内で限定的に存在する事例や、集落を2大別したときの片方の大群内に偏在する傾向をみせるが、その好例に静岡県桜畑上遺跡がある。井戸尻式期の円形ブ

ラン、5～7本柱穴の竪穴住居25軒が環状に巡る稀有な事例で、酷似プランを抽出すると、5本柱穴のA系統3軒が南西支群、E系統2軒が北東支群に収まるほか、B系統も北東支群内に偏在している。ここでは酷似プランを竪穴住居の移動(軌跡)を示すものと推測し、設計仕様の一致、または柱、梁などの上屋材の再利用(移設)の可能性を想定した。

一集落内に複数の竪穴類型が存在し、遺跡間で竪穴類型の共通性がある点については長谷川氏が設計仕様の存在を指摘したとおりで、竪穴住居を建築するさいの規範となる設計仕様が地域、時期ごとに存在したと考えてよく、唐草文土器圏や曾利式土器圏に対応するような分布圏を想定しうる。また竪穴住居建築にあたっては、長谷川氏が説くように、ある基準尺をもとに柱穴配置、竪穴プラン、炉の位置や埋甕の埋設位置に至るまでの各種仕様が一体的、統一的に決められたことは想像に難くない。

筆者は竪穴の柱穴配置が基準尺の倍尺値で決められたものと考え、縄文中期後半に身体尺のうち肘長に由来する40cm前後の基準尺を想定し、駒ヶ根市辻沢南遺跡の唐草文期における4本主柱の竪穴住居について分析した結果、桁行間の柱穴間距離(横軸幅)で5倍尺から11倍尺の7サイズに分類できることを明らかにした(櫛原2015)。したがって大小さまざまにみえる竪穴住居は、基準尺に基づいた設計仕様をもち、倍尺値の違いによる建物サイズを選択的に採用していたといえる。

同一集落の中にいくつかの柱穴類型、さまざまなサイズの違いがある中で、サイズが同じ設計仕様、酷似プランが複数存在する点に関しては、同じ設計仕様に基づく竪穴住居の構築(仕様規格の同一性)、竪穴住居間での上屋材の再利用(建築材の移設・転用)の2案が考えられる。それらの竪穴住居が時間的な連続性をもつのであれば後者の可能性が高く、また同一時期の場合、前者の可能性が大といえるが、時期的に連続的であっても前者のケースが想定できる。また出土土器から同一時期と認定される事例でも土器型式に現われない時間差を持つ場合が考えられることから、後者と判断すべき事例もあるだろう。同じ居住者や血縁性をもつ別居住者による建替では、竪穴住居間に系譜性がある可能性が高いと考えられる。一方、集落居住者に設計仕様として共通認識されていたとすれば、酷似プランの竪穴住居間に居住者間の系譜性を必ずしも認めることはできない。

前稿では、縄文中期の建築材にクリ材が多いことから、上屋材の使い回しを想定した(櫛原2016a)。クリは腐朽しにくい一方、古材では加工しにくい特徴から、柱材、梁材を解体し、別の竪穴住居の新築時での再利用を想定し、多摩ニュータウンNo.446B遺跡、同No.939遺跡で酷似プランが土器型式上、時期的に連続する例を確かめたが、とくに多摩ニュータウンNo.446B遺跡58-79号住では建築材とともに炉石の移動を伴うことが推定された。

酷似プランの竪穴住居についてはまだ分析例が少なく、その存在に対する認知度、評価は定まっていないことから、しばらくは事例分析を積み重ねていく段階にある。ここでは増野新切遺跡を取り上げ、唐草文土器圏の様相を検討したい。

I. 増野新切遺跡の集落研究史

増野新切遺跡は長野県南部の下伊那郡高森町に所在し、天竜川右岸の河岸段丘面に立地する。1972年に中央自動車道建設に伴い調査が行われ、南東側傾斜の緩斜面に林道をはさんで南西側のB区、北東側のD区から中期後半の竪穴住居78軒が検出された(図1、長野県ほか1973)。この遺跡については

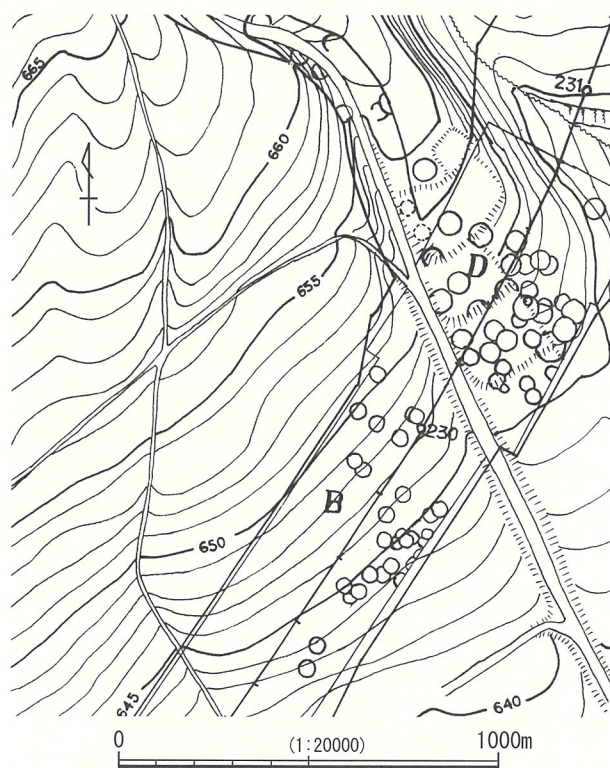


図1 増野新切遺跡全体図(長野県ほか1973)

報告の直後、1976年に八木光則氏により竪穴住居を平面形で類型化した集落分析が行われ、中期後半を第1期から第4期に分けた唐草文土器編年（伊那谷編年）に沿って時期ごとに検討がなされているので、まず氏の分析内容のみをみておきたい（八木1976a・b）。
第1期（B1・2・14・24・28号住、D38・40・43・45号住）

東寄りに中心をもつ弧状配置。円形プランで、主軸はN50～70°Wとなるが、主軸方向、柱穴本数が不明なものが多い。炉は小形円形石囲炉に統一され、炉石が外されたものはほとんどなく、埋甕はない。
第2期（B9・11?・12・17?・18?・19?・26号住、D1?・2・9?・12・14・24・26・29・34・37・44号住）

北寄りに偏在し、円形プランが多いほか、方円、円方形で6本柱穴が多く、主軸はN30～80°Wで、炉は大～中形円形石囲炉であるが、約2/3は炉石が外されている。埋甕を持つ住居が圧倒的に多いほか、副炉1例、伏甕3例、石壇ピット2例がある。

第3期（B3・4・7・8・10・13?・20・22・23・25・27・30号住、D1・2・3・4・8・13・22?・30・31?・32・35?・36・44号住）

第2期とほぼ同じ配置を示し、円方形・方円形がほとんどで、円形は少なく、4本柱穴が多い。主軸はほとんどが北西を向く。炉は大～中形方形石囲炉で、約2/3は炉石が外されている。埋甕はほとんどの住居に存在し、石壇ピット2例、炉右に石組をもつもの1例がある。

第4期（B5・6?・15・16・21号住、D4・6?・7・11・15?・16・17・18?・20?・21?・23?・25・27・33号住）

配置は2期以来同じで、円方形プラン、4本柱穴が多く、主軸方向はおおむね北西を向く。大～中形方形石囲炉で、中形のものほとんど炉石を欠く。埋甕はほとんどなく、石壇ピットは1例のみ。

八木氏の論考は、中央道建設で明らかになった伊那谷地域の縄文中期後半の集落や竪穴住居の様相を整理したもので、伊那谷の中期後半土器群を4大別することで、中部関東地方と対比しうる時間軸を与えたという点で評価されてきた。今日的な見方では第1期は曾利Ⅰ式併行、第2期は曾利Ⅱ式併行、第3期は曾利Ⅲ式併行、第4期は曾利Ⅳ～Ⅴ式併行であるが、論考中、八木氏は中期後半の各時期がさらに2～3期以上に細分される可能性を示唆したよう

に、今日、増野新切遺跡を含む下伊那地域の唐草文土器は八木氏のいう第3・4期を各3細別する方向で進められている。ただ4期区分の大枠については唐草文土器変遷観の共通理解として何ら変更の余地はなく、現在でもそのまま集落分析の時期設定として利用できるものである。そのほか、周辺に同時期の集落があった場合、同一集団の移動による遺跡群形成を想定した領域内移動論を採る点、炉石の欠如（転用）が第2期から普遍化した指摘など注目すべき指摘といえるが、一方で増野新切遺跡を含む中期後半の伊那谷の集落に対する総括に関しては、各竪穴住居は同一集落内でも主軸方向、規模、プラン、支柱穴が一定ではなく、「それぞれの個性をもち、全体として統一されることはなかった」と評価したのは、当時の竪穴住居、集落に対する見方の一端を示したものといっていよう。

II. 分析の視点と方法

増野新切遺跡の集落は、全貌が明らかな好例とはいえないものの、林道の分断で北東側（D区）と南西側（B区）の2群に分かれ、各区の竪穴住居群に内接するようにピット・土坑群が存在することから、内側に土坑群を有した環状集落であり、集落は南側の調査区外に広がると考える。竪穴住居群の支群構造は判りにくいから、B3～9号住にひとつのまとまりがあることから、調査範囲内に少なくとも3支群の存在を認め、南支群、西支群、北支群と仮称する（図8）。標高が高い位置に存在する北支群の竪穴住居の軒数が多く、次いで南支群が多いが、西支群は少ない。各支群の竪穴住居は以下のとおりである（図2～4・8・9）。

南支群（B1・2・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28号住）

西支群（B3・4・5・6・7・8・9・30号住）
北支群（D1・2・3・4・7・8・9・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・29・30・31・32・33・34・35・36・37・48号住）

増野新切遺跡の竪穴住居のうち、第1期は八木氏も指摘するように柱穴配置が明確ではないことから、ここでは分析対象から除外する。したがって第2期から第4期の竪穴住居を対象として設計仕様の

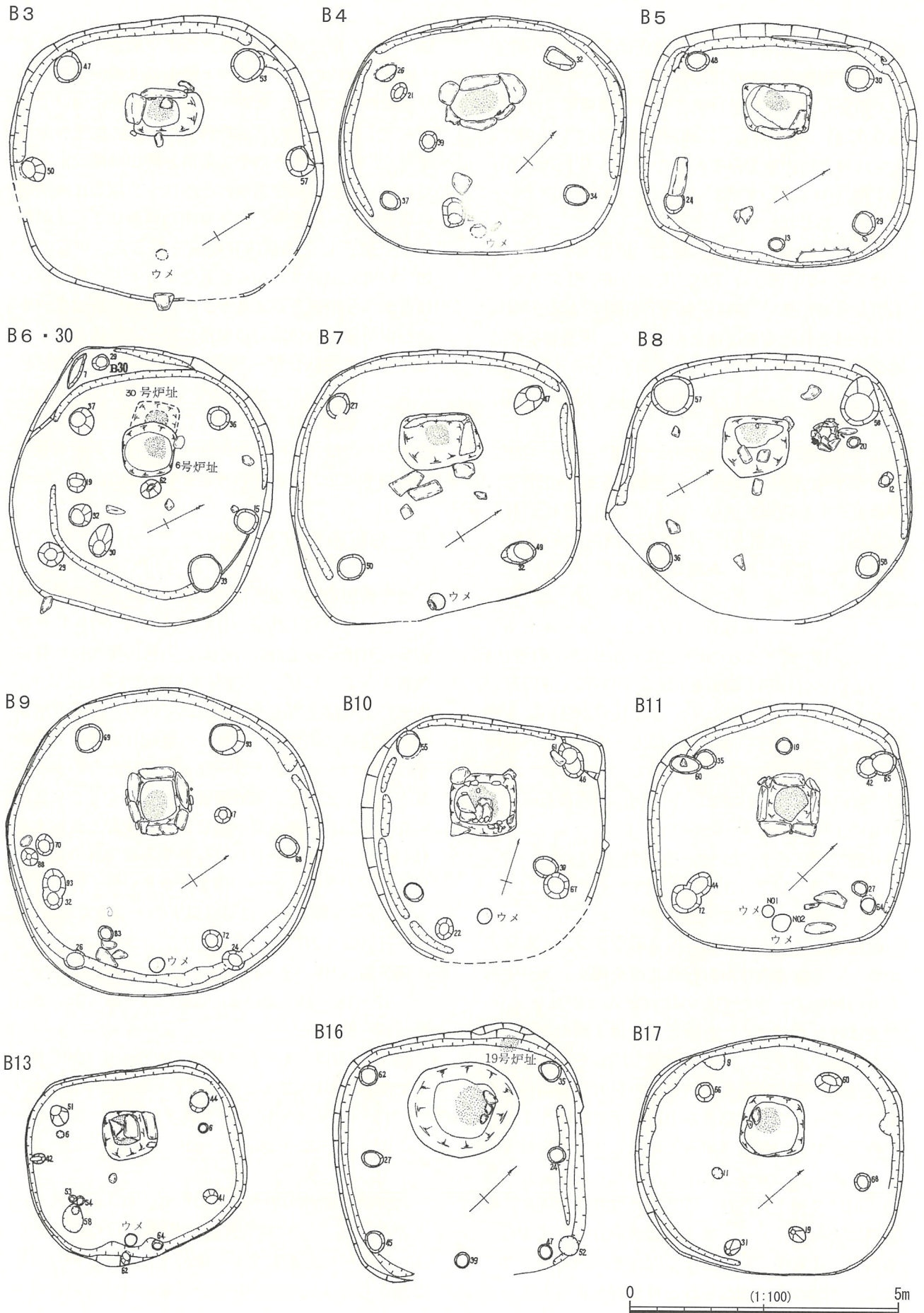
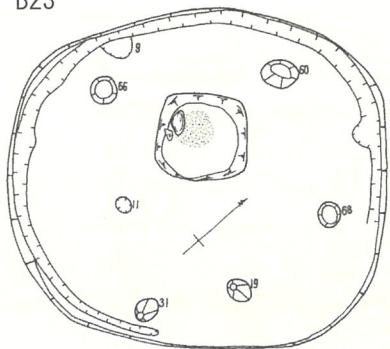
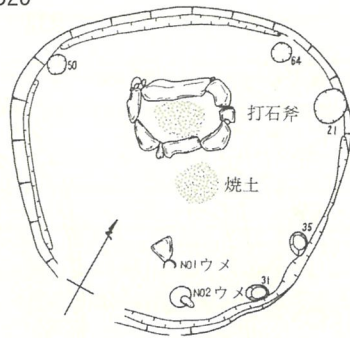


図2 増野新切遺跡の竪穴住居跡 (1)

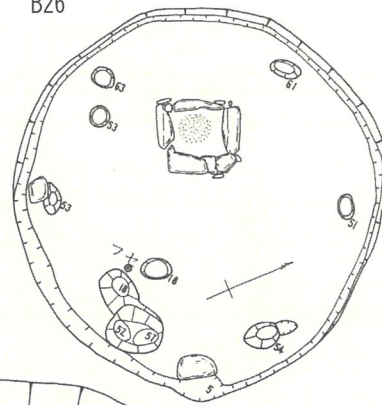
B23



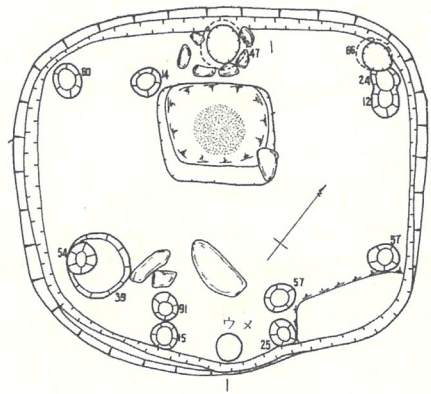
B25



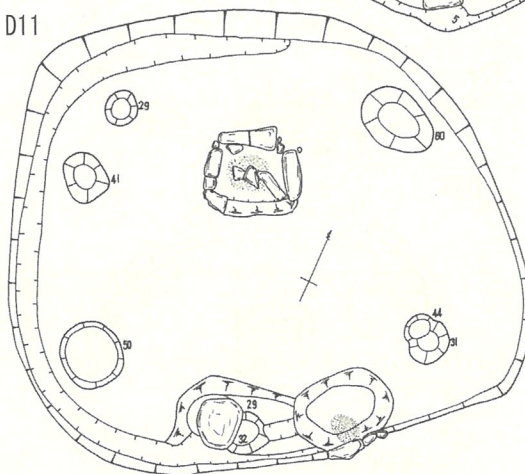
B26



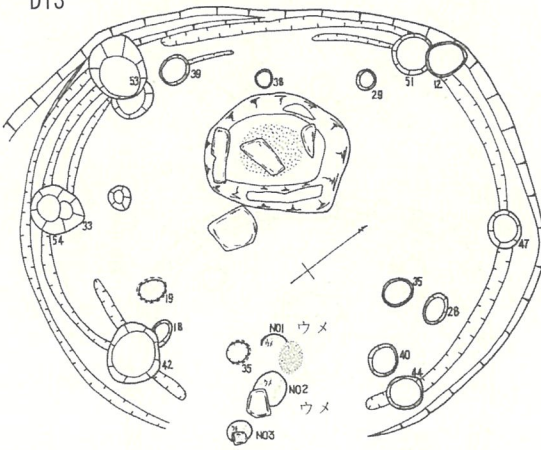
D8



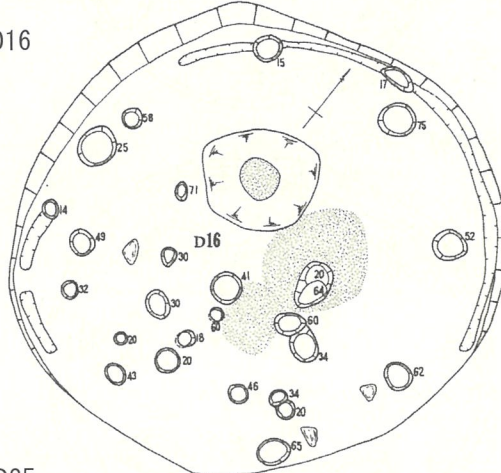
D11



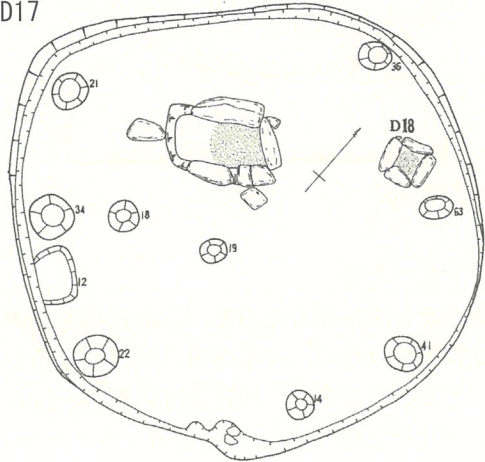
D13



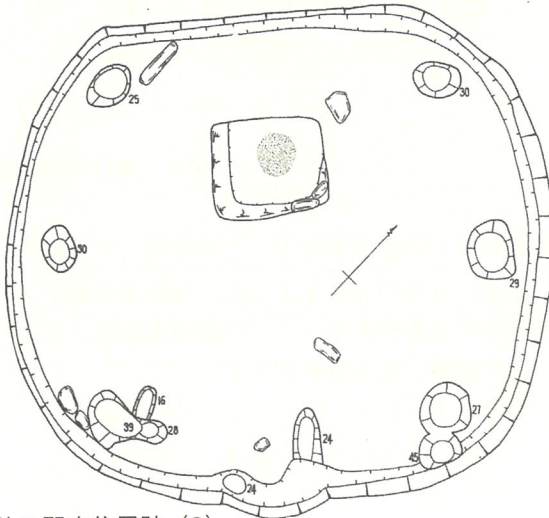
D16



D17



D25



0 (1:100) 5m

図3 増野新切遺跡の竪穴住居跡 (2)

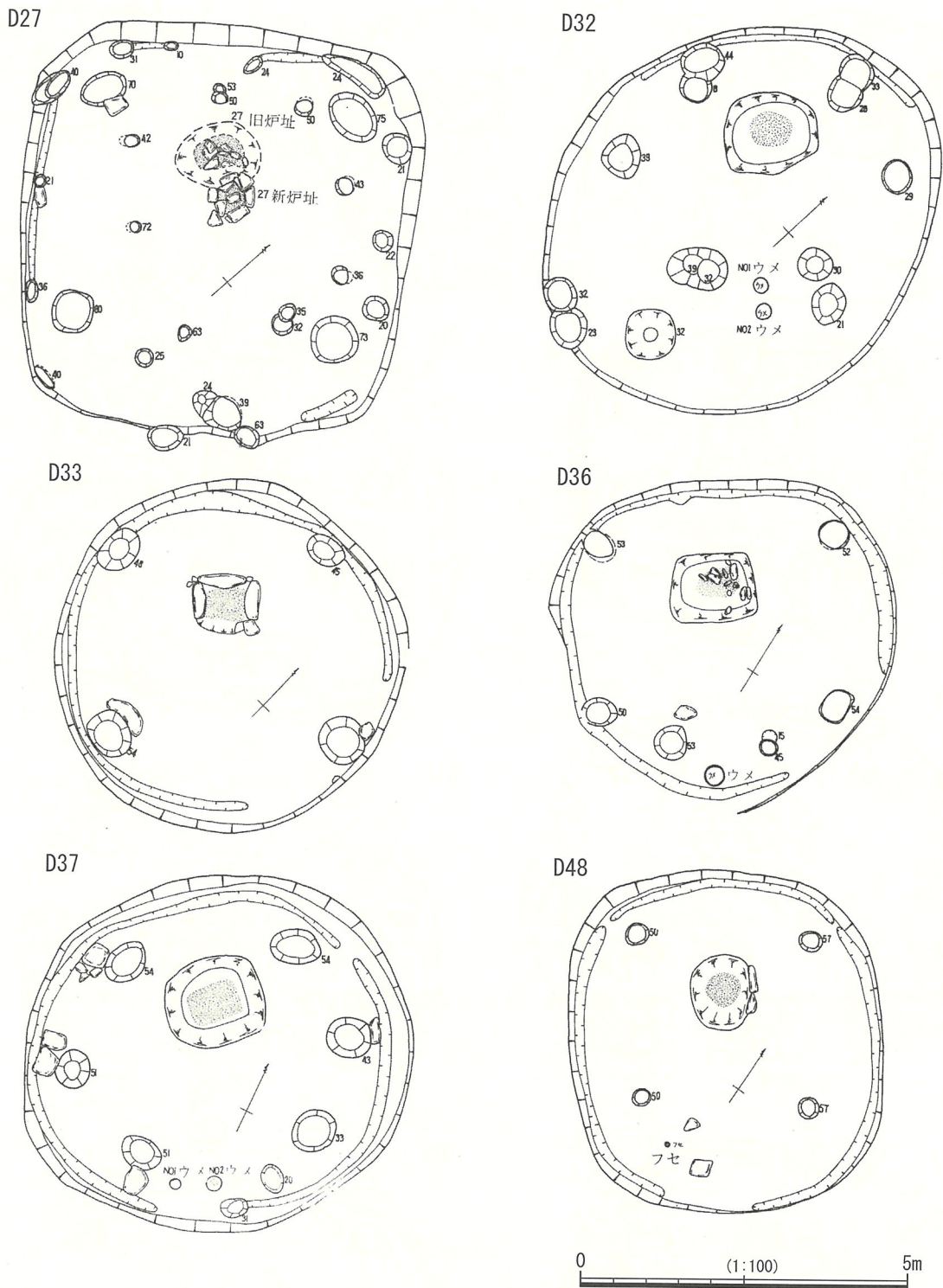


図4 増野新切遺跡の竪穴住居跡 (3)

検討、酷似プランの抽出を行う。この時期の支柱配置は主に4本、6本の2種を主とし、ほかに少数ではあるが5本・8本がある。ここでは4本類型、5本類型、6本類型、8本類型と呼ぶ。

分析手法は、①トレース図の重ね合せ法による酷似プランの抽出、②集落内での変遷、③設計仕様の

想定と分類である。

酷似プランを抽出したのち、設計仕様を推測する過程は容易ではなく、一集落内の検討では類型抽出にとどまることが多い。周辺遺跡の類例を持ち寄ることで、やがて設計仕様として昇華することができ、当面は①②段階の検討にとどまる場合が少なくない

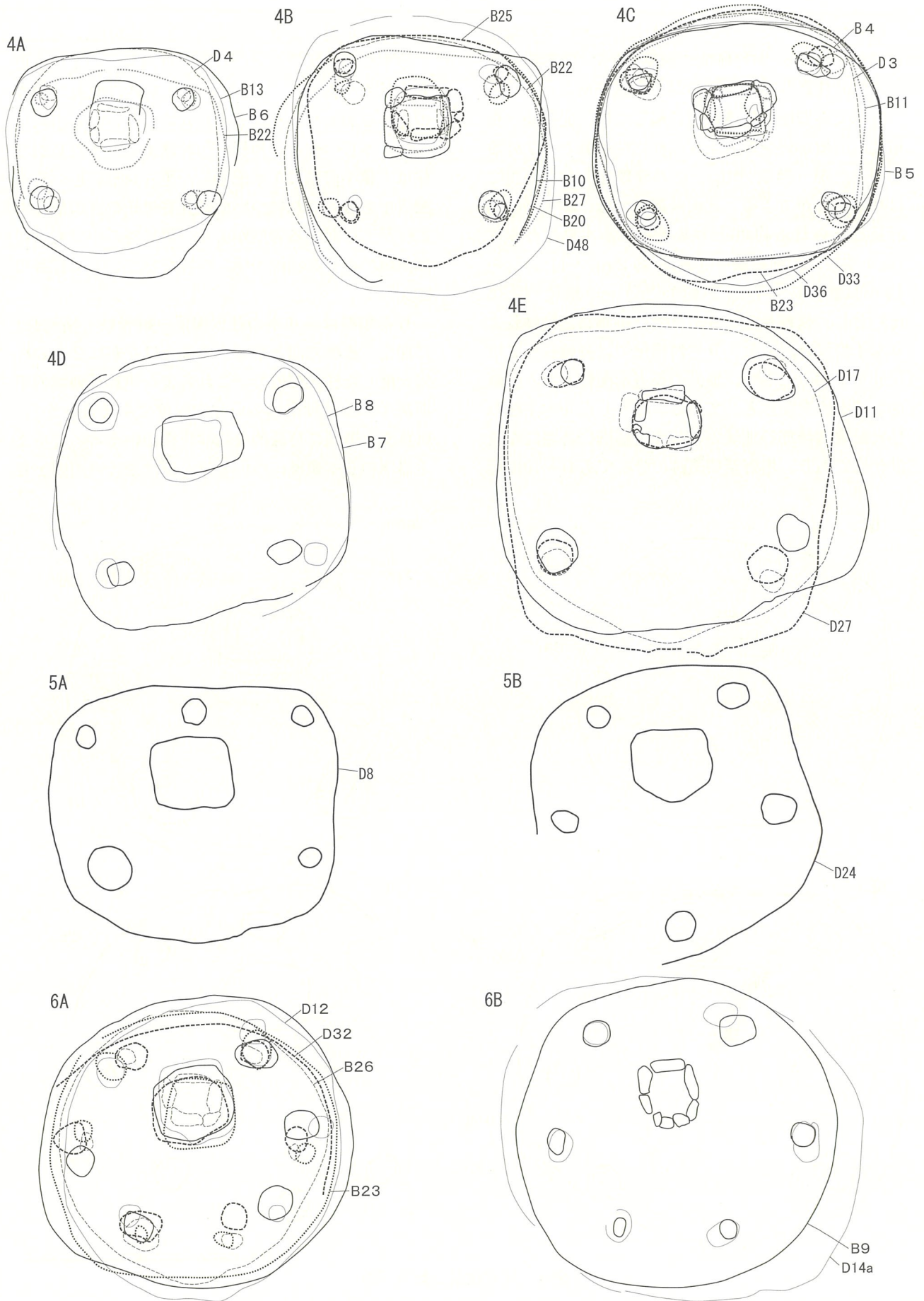


図5 竪穴住居の類型 (1)

と思われる。ただし今回の唐草文期における対象地域については、先行研究(櫛原 2015)の蓄積から③の設計仕様レベルでの検討が可能である。

唐草文土器圏の4本類型に関しては、先に駒ヶ根市辻沢南遺跡例を取り上げ、柱穴間の幅から7分類を行ったが(櫛原 2015)、この分類をおおむね当てはめることができる。辻沢南遺跡では、柱穴間幅は肘長とみられる約40cmの基準長が基本単位とみられ、4本柱穴の横軸長を5倍尺(約2m)~11倍尺(約4.4m)、縦軸長を4倍尺(約1.6m)~9倍尺(約3.6m)とし、横軸長5~9倍尺では縦軸長を横軸長よりも1倍尺分短くし、9~11倍尺では縦軸長を2倍尺分短くすることで、横長の長方形配置となる特徴的な4本柱穴配置としている。こうした4本柱穴の柱穴配置は伊那谷地域の唐草文土器圏に普遍的な設計仕様であり、増野新切遺跡の分析でも6~10倍尺

の5分類が明らかとなった(4A~D類型、図5)。

5本類型は状態の良いD8、D24号住の2軒を取り上げた(図5)。D8号住は4本柱穴配置に炉奥の1本を加えたような5本柱穴であり、長谷川氏はこの5本目の柱を「神柱」と評価する。またD24号住は主軸手前側に1本配置した逆五角形に近い5本配置である。これについては長谷川氏の「円形5本柱型」に関する考察があり、伊那谷の中でも上伊那地域での分布状況が明らかになっている(長谷川 2000)。

6本類型は、4本の柱穴配置(縦軸長・横軸長)に加え、横軸方向と平行するように左右に2本の柱穴を配した柱穴配置で、これもまた伊那谷地域の中期後半、前葉段階に多い柱穴配置であることから、唐草文土器圏に特徴的な設計仕様といえる。唐草文土器圏の6本類型については、神村透氏の円周を角

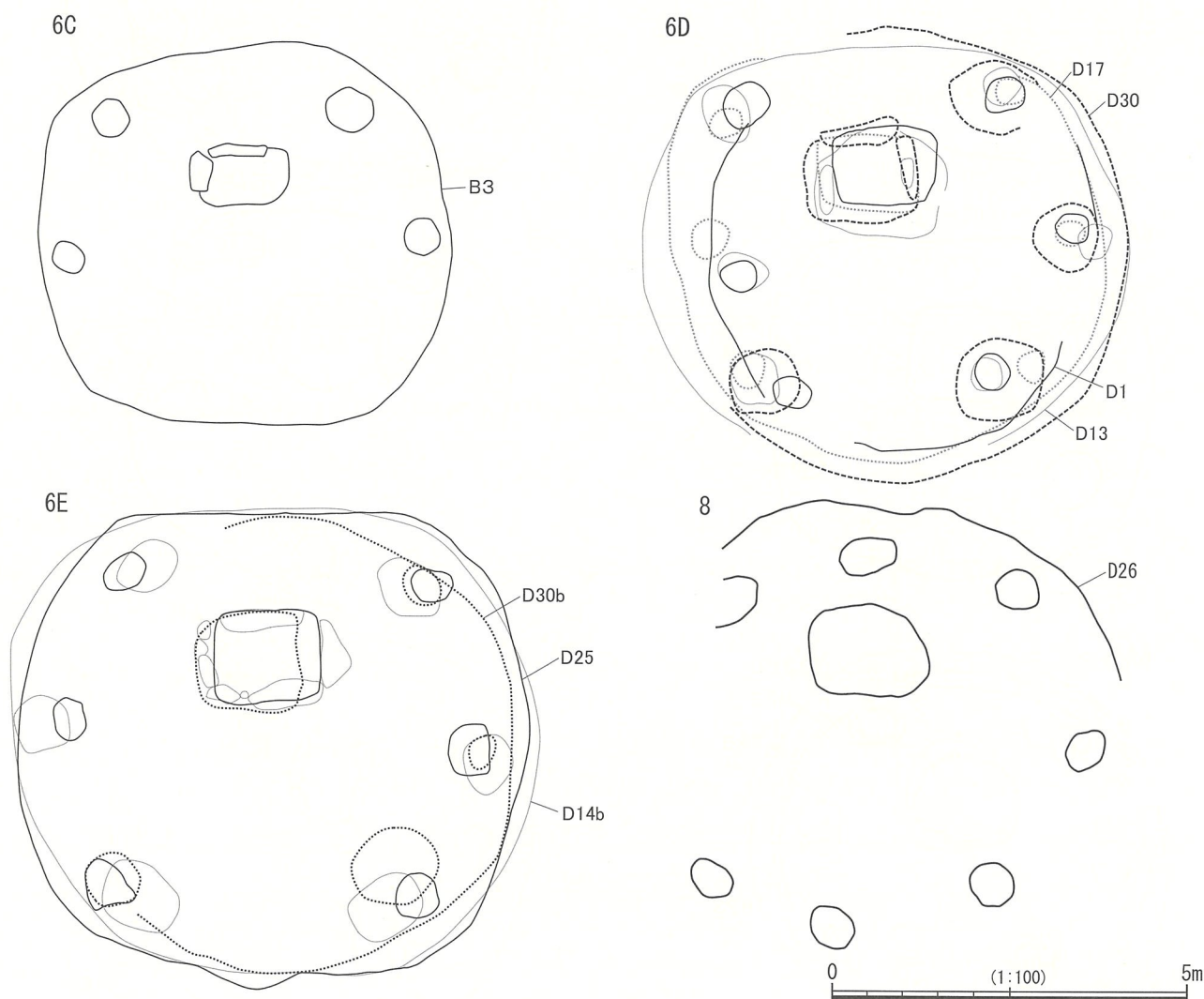


図6 竪穴住居の類型(2)

度で分割する設計仕様、長谷川氏の単位長をもとにした設計仕様の想定があるが、今回、増野新切遺跡の6本類型を扱うにあたり、後述するように4本類型同様に柱穴間をつなぐ長さを基準長の倍尺値での設計を想定すると、結論的には中軸長で10~14倍尺の5分類が可能であった(6A~E類型、図5・6)。

8本類型はD26号住のみで、柱穴を一部欠くが8本主柱と推定する(図6)。6本類型の柱穴配置に主軸上手前、奥壁に1本ずつを加えたような柱穴配置で、6E類型よりもやや大きい。

筆者は約40cmの肘長由来の基準尺を用いて柱穴間距離を導いたと推測するが、長谷川氏は基準となる「単位長a」をもとに半径2aの範囲に炉、半径4aの円周上に柱穴、5aの円周ラインを堅穴外形とする設計仕様を推測する。さらに奥壁を円周ラインから1a分掘り残すことで、奥壁が直線的なラインをもつ堅穴住居を「辻沢南型」と呼称し、「円形6本主柱穴型」と「円形4本主柱穴型」の2種について設計仕様を提示した。それらの単位長について、たとえば円形6本主柱穴型の単位長aの実数値は最長75cm、最短44cmで、最頻度55cm台、平均61cmとなるという。この点に関し、長谷川氏は渋谷文雄氏の下総地域での分析事例として主柱穴が1本増えるごとに堅穴の円周直径が60cm拡大するという現象との類似性を指摘し、今後の課題として「身体尺の存否を検討すべき」と記している。

4本、6本類型はともに基準値をもとにした設計仕様であるが、櫛原案と、長谷川案との間にはどのような相違があるだろうか。長谷川氏は柱穴の位置を単位長aの4倍の円周ライン上、堅穴プランを5倍の円周ライン上とする原理を見出し、様々な堅穴サイズの違いを単位長aの違いとして説明した。すなわち長谷川氏は単位長の倍尺値による円周上に柱穴を割り付ける設計仕様を想定する。柱穴の割付については、円周に接する側辺の隅から1~2単位長分差し引いて対角線を結ぶという独特な案で、その点に関しては検討の余地がある。それに対し筆者は基準尺を居住予定者の身体尺に基づく肘長と考え、40cmを前後するサイズと推測し、柱穴間の距離を基準尺の倍数とするサイズに応じた仕様を想定した(櫛原2015)。現時点では柱穴間距離についての提示案であるが、後述するように堅穴プランについても説明が可能である。ただし5本以上の柱穴をもつ多角形の柱穴配置でも柱穴の割付を柱穴間距離で説

明できるか定かではない。

いずれにしても一集落内での堅穴住居の柱穴本数ごとに酷似プランの抽出を行うことで、堅穴住居の分類、類型化を行い、それをもとに集落の構造分析を進める。分類された堅穴類型間に一定のサイズの変化が認められた場合、倍尺値の検討により設計仕様の検討が可能になるといえる。

Ⅲ. 増野新切遺跡の堅穴住居の類型と分布

ここでは主柱穴数で大別された各堅穴類型について説明する(図5・6)。

(1) 4本類型

4本柱穴のうち横軸長が縦軸長よりも1倍尺分程度長い横長長方形となる柱穴配置で、平面プランは隅丸長方形を基本形とする。中央奥壁寄りに切炬燵状の大形石囲炉をもつものが多く、伊那谷地域の中期後半の典型的な住居型式である。4A~4Eの5分類として整理できる。

4A類型

B6・13・22号住、D4号住が該当する。柱間は奥壁側の横軸長が2.5m前後、手前横軸長が2.5~3mとやや幅をもつものに対し、縦軸長は約2mと一定することから、横軸長6倍尺、縦軸長5倍尺を基本形とする柱穴配置といえる。堅穴プランは主軸長3.6~4.4m、交軸長3.8~4.2mで、縦横方向に柱穴幅より2倍尺ずつ、計4倍尺加えた大きさとなっている。南支群にB13号住(第3期)、B22号住(第4期)が近い位置関係で存在し、両者が系譜性をもつならばB13号住からB22号住への動きを示す。また西支群にはB6号住(第4期)、北支群にはD4号住(第4期)がある。このように本類型は第4期を中心に各支群に分布する。

4B類型

B10・20・25・27号住、D22・48号住が該当する。柱間は奥壁横軸長が2.8~3.0m付近、手前横軸長が2.8~3.3m、縦軸長が2.4~2.8mと縦横ともに幅があり、縦横ともに6~7倍尺となるが、ここでは横軸長7倍尺、縦軸長6倍尺とする仕様と考えておく。堅穴プランは主軸長4.3~5.2m、交軸長4.4~5.1mで、主軸長方向に差異が大きく、平面形では酷似性が弱い。南支群にはB10・20・25・27号住があり、いずれも第3期である。B25号住とB27号住は位置関係が近いほか、B10号住とB20号住がやや近く、

2棟1単位的な配置となる。西支群にはない。北支群にはD22（第3期）・48号住（D48号住は八木氏論文では洩れているが第3期とする）が存在するが、両者は大きく離れている。このように本類型は第3期に北・南支群に分布をみせる。

4C類型

B4・5・11・23号住、D3・33・36号住が該当する。本類型は酷似性が高く、柱間は横軸長3.3～3.5m、縦軸長2.8m前後となり、横軸長8倍尺、縦軸長7倍尺とする柱穴配置といえる。竪穴プランは主軸長4.4～5.4m、交軸長は5～5.4mで、やや横長の楕円形となる。南支群にはB11（第2期）・23号住（第3期）が存在し、近い位置関係にある。また西支群にはB4（第3期）・B5号住（第4期）があり、これらもごく近い位置関係を示している。北支群にはD3（第3期）・D33（第4期）・D36号住（第3期）があり、3軒とも近い位置関係にあるが、中でもD33号住とD36号住、D36号住とD3号住はほぼ同じ近さにあり、D3号住またはD36号住からD33号住への系譜性がうかがえる。

4D類型

西支群のB7・8号住が該当し、南、北支群にはない。柱間は奥壁横軸長が約3.5m、手前側横軸長が3.4～3.8mで、手前横軸長にやや幅をもつが、縦軸長は3～3.2mとほぼ一致し、横軸長9倍尺、縦軸長8倍尺を仕様とする柱穴配置といえる。竪穴プランは主軸長5m、交軸長5.4mの隅丸方形で、2軒はよく一致し、縦軸長、縦軸長に約4倍尺ずつ加えた大きさである。ともに第3期で、両者は近い位置関係にある。

4E類型

D11・27号住が該当する。柱間は奥壁横軸長が約4m、手前横軸長が4～4.4m、縦軸長は左縦軸長約3.6mとほぼ一致し、右縦軸長は3～4mと大差をもつが、ここでは横軸長10倍尺、縦軸長9倍尺とする仕様とみておく。竪穴プランは主軸長6～6.2m、交軸長6.1～6.8mの隅丸方形プランである。2軒は第4期に北支群に存在する。

(2) 5本類型

5A類型

D8号住のみ。長谷川のいう「4+1本主柱」に該当し、4本柱の部分は横軸長3.8～4m、縦軸長は2.5～2.6mで、厳密には手前横軸長がやや短くなっているが、横軸長10倍尺、縦軸長6倍尺とみら

れる。炉裏の柱穴は横軸からの出が約40cmと短い。竪穴プランは隅丸方形で、主軸長4.8m、交軸長5.3mであり、竪穴サイズとしては4Cまたは4D類型と同程度で中形の部類である。

5B類型

D24号住のみ。逆五角形の柱穴配置で、柱間は奥壁2柱穴間が約2.5m（約6倍尺）、奥壁寄り左右柱穴間が2～2.3m（約5倍尺）、手前左右柱穴間が約2.8m（7倍尺）で、主軸長5.5m、交軸長5.4mの隅丸多角形であり、竪穴サイズは4Cまたは4D類型と同程度である。

(3) 6本類型

主軸に対して左右に3本ずつの柱穴を配した円形プランを基本形とする竪穴住居で、やはり約40cmの基準尺を想定した類型分類が可能である。ここでは左右の柱穴間（中軸長）をもとに6A～6Eの5分類とする。6本類型は時期的に4本類型に先行するものが多く、中期中葉段階の柱穴配置からの系譜が考えられ、炉形態にも平置き石囲炉から切炬燵状方形石囲炉への変化をみせる。

6A類型

B23・26号住、D12・24・32・37号住が該当するが、重ねてみると柱穴はばらつきが大きく、よく一致する柱穴は6本中2本程度である。柱間は奥壁横軸長2.4～2.8m、手前横軸長1.8～2.0m、左右縦軸長2.8～3.2m、中軸長約4mで、横軸長6倍尺、縦軸長8倍尺、中軸長10倍尺とする柱穴配置を仕様として想定する。竪穴プランは主軸長4.9～5.5m、交軸長4.8～5.8mで、縦軸長および中軸長に左右、上下に2倍尺ずつ計4倍尺程度加えた長さともみられる。

南支群には第2期にB26号住、第3期にB23号住があり、北支群には第2期にD12・24・37号住、第3期にD32号住がある。B23・26号住、D32・37号住、D12・24号住はそれぞれ近い位置関係にあることから、南支群ではB26号住からB23号住へ、北支群ではD37号住からD32号住への動きがうかがえる。

6B類型

西支群にB9号住、北支群にD14a号住がともに第2期に存在する。2軒は概ね一致し、柱間は奥壁横軸長2.4～2.8m、手前横軸長約2m、中軸長4.5mで、仕様としては横軸長7倍尺、縦軸長9倍尺、中軸長11倍尺とする柱穴配置を想定する。竪穴プランは主軸長約5.8～6m、交軸長5.9～6.7mで、交軸方

向に差異が大きくなっている。

6C類型

西支群の第3期にB3号住があるのみ。手前2本を欠くが、柱間は奥壁横軸長3.3m、縦軸長推定3.8～4m、中軸長4.9mで、横軸長8倍尺、縦軸長10倍尺、中軸長12倍尺の仕様を想定する。堅穴プランは主軸長5.3m、交軸長6.8mと、6B類型と同規模となっている。

6D類型

北支群、第3期のD1・13・30号住、北支群、第4期のD17号住が該当し、すべて北支群にのみ存在する。図の重ね合せでは6本中5本が概ね一致し、奥壁横軸長3.6～3.8m、手前横軸長2.8～4m、縦軸長は左縦軸長が約4m、右縦軸長が4.2～4.4m、中軸長は4.8～5.2mで、横軸長9倍尺、縦軸長11倍尺、中軸長13倍尺の仕様を想定する。堅穴プランは主軸長5.6～6.4m、交軸長は6.2～6.8mで、縦軸長、中軸長に約4倍尺を加えた大きさである。これらの位置関係はD1・30号住、D13・17号住が近く、後者ではD13号住からD17号住への変遷過程が考えられる。

6E類型

北支群に第2期のD14号住、第3期のD30b号住、第4期のD25号住がある。奥壁を直線的にした隅丸方形に近い平面プランで、重ね合せ図ではプラン、柱穴配置ともに概ね一致している。柱間は奥壁横軸長3.8～4.4m、手前横軸長3.6～4.4m、縦軸長は左縦軸長4.7m、右縦軸長4～4.8m、中軸長は5.6～6.4mで、横軸長10倍尺、縦軸長12倍尺、中軸長14倍尺とする仕様を想定する。堅穴プランは主軸長6.4～6.8m、交軸長は7～7.4mで、縦軸長、中軸長に4倍尺程度加えた長さを示す。第2期から第4期にかけてD14号住、D30b号住、D25号住に変遷したとみられる。

(4) 8本類型

D26号住の1軒のみ。柱穴間距離は左右の3本の柱穴間を約2.4m(6倍尺)、手前と奥壁側の各3本の柱穴間を2.0m(5倍尺)とするとみられ、堅穴プランは縦軸長約7m、横軸長7.3mと推定されることから、6Eサイズよりもさらに大形の類型で、本遺跡では最大級となる。柱穴配置が6本類型と類似性を認めることから、6Eサイズのよりもひとまわり大きいサイズとして、6本類型の系列に位置づけられるかもしれない。

IV. 4本類型と6本類型のモデルとサイズ

4本類型の4A～4E類型は、横軸長よりも短軸長を1倍尺(約40cm)短くした主柱配置を示し、横軸長で6倍尺(約2.4m)～10倍尺(約4m)、縦軸長で5倍尺～9倍尺の5サイズの仕様を想定した。ここでは柱穴間の横軸長の長さをもとに4A類型を4-6倍尺サイズ、4B類型を4-7倍尺サイズ、4C類型を4-8倍尺サイズ、4D類型を4-9倍尺サイズ、4E類型を4-10倍尺サイズとする(図7)。ただし個々の堅穴住居の柱間距離を測ると1軒の堅穴住居でも左右の縦軸長、奥壁、手前の横軸長の長さはまちまちで、酷似プランの堅穴住居間でも差異の大きなものがあるのは事実であり、ここでいう仕様とは、いくつかの平面プランを重ね合わせることで推定されるモデルといえよう。また堅穴プラン外形は横軸長、縦軸長にそれぞれ4倍尺(約1.6m)加えた長さとなっている。つまり堅穴プランも柱穴配置をもとに設定されたと考えられる。

実際の構築手順として柱位置を決めるには、木の棒や紐を用い、4辺が長方形配置となるように対角線長を微調整しながら操作したとみられ、長谷川氏が説くように炉の手前に設定した中心点からの一定距離(対角線長の半分、半径)による円周も利用された可能性が高い。

同様に6本類型についてみると、6本の柱穴のうち横軸長は6～10倍尺、縦軸長は8～12倍尺あり、さらに縦軸に直交する左右2本の柱穴の位置は、サイズの大小に関わらず概ね縦軸からの出が70～120cm幅で、80cm前後が多い。つまり約2倍尺分の出があることから、棟持ち柱間の長さ(中軸長)は横軸長に左右4倍尺を加えた長さとなり、模式的には6倍尺サイズでは中軸長10倍尺、7倍尺サイズは11倍尺、8倍尺サイズは12倍尺、9倍尺サイズは13倍尺、10倍尺サイズは14倍尺を示すことになる。したがって6本主柱が示す横軸長・縦軸長・中軸長は、6A類型が6倍尺・8倍尺・10倍尺、6B類型が7倍尺・9倍尺・11倍尺、6C類型が8倍尺・10倍尺・12倍尺、6D類型が9倍尺・11倍尺・13倍尺、6E類型が10倍尺・12倍尺・14倍尺となる。ここではそれらを6-10倍尺サイズ、6-11倍尺サイズ、6-12倍尺サイズ、6-13倍尺サイズ、6-14倍尺サイズとよぶことにする(図7)、6本柱穴のうち、中軸長間の倍尺サイ

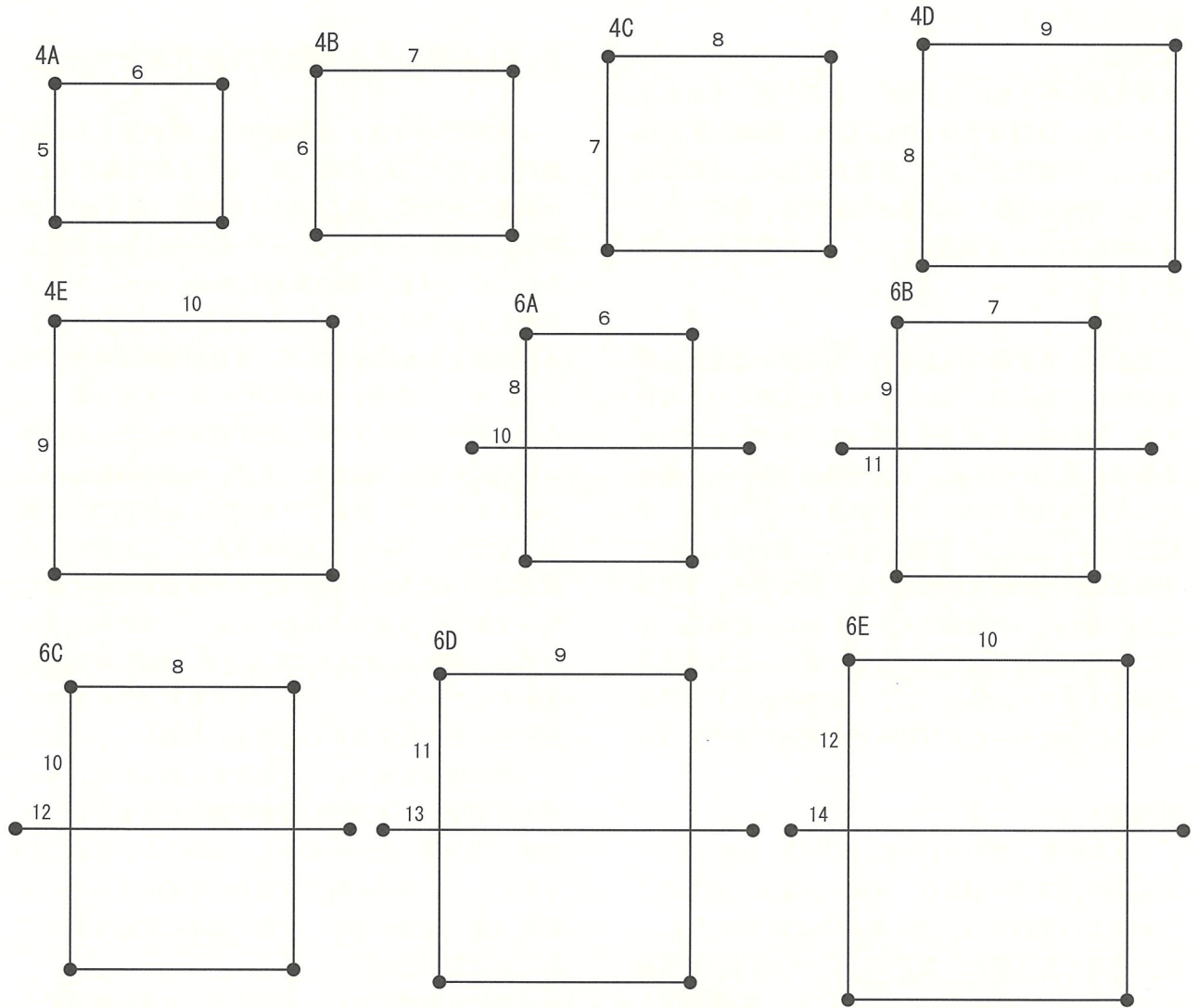


図7 柱穴配置の模式図

ズで10倍尺サイズ（約4m）～14倍尺サイズ（約5.6m）に5分類すると、4本類型と同様に5サイズが存在することになる。この6本柱穴類型の縦横比は4本柱穴のそれと類似することがわかる。すなわち6本柱穴類型の縦軸長と中軸長比は、10倍尺サイズでは縦横比が8：10（4：5）、12倍尺サイズでは10：12（5：6）、14倍尺サイズでは12：14（6：7）となり、4本類型の縦軸長を横軸長の1倍尺分短くする原理との類似性が指摘でき、一見異なる柱穴配置が実は同じような縦横比で構成されていることがわかる。

さらに6本類型の中軸長をみると1倍尺刻みで10倍尺から14倍尺となっていて、4本類型の横軸長6倍尺から10倍尺を上回る長さである。4本類型が小形から中形に対応した柱穴配置なのに対し、6本類型では6-10倍尺サイズ以下のものはなく、6本

類型が中形から大形サイズに対応した柱穴配置であることがわかる。したがって時間差を示すようにみえる4本類型と6本類型の間には、横軸長・中軸長の倍尺値が示すように、竪穴サイズに応じた統一的な柱穴配置の原理、原則があることがうかがえる。

V. 時期的にみた竪穴類型の分布と系譜

増野新切遺跡の竪穴住居を時期別、類型別に整理すると図8・9、表1ようになる。

第2期には、南支群に4C（1軒）、6A（1軒）、西支群に6B（1軒）、北支群に6A（3軒）・6B（1軒）・6E（1軒）が存在する。このように4本類型（4C）1軒に対し、6本類型（6A・6B・6E）は7軒で、6本類型が主体をなす。その分布は南支群に4本・6本類型が各1軒、西支群に6本

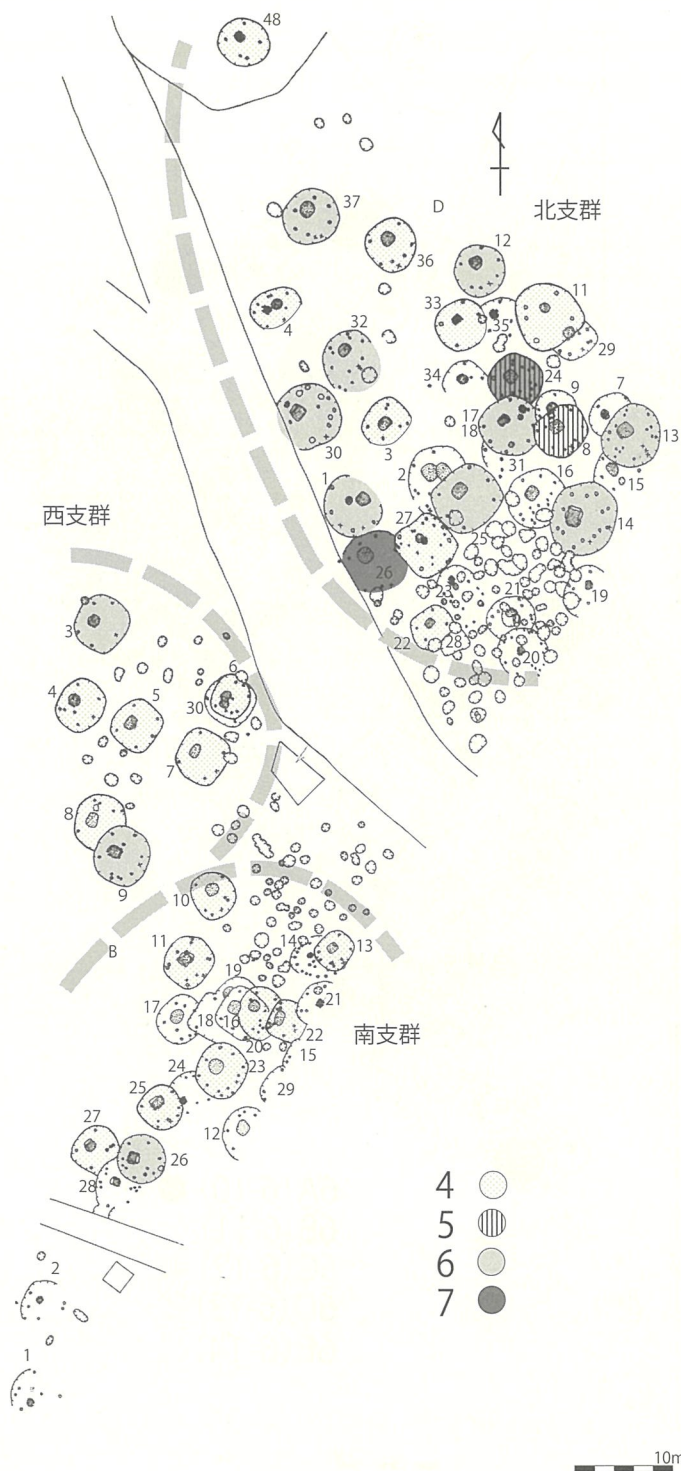


図8 増野新切遺跡の柱穴類型分布

類型1軒、北支群に6本類型が5軒と、北支群に6本類型が偏った分布をみせている。また6本類型は6A・6B・6Eの3サイズがあり、小～中形が多い。

第3期には、南支群に4A(1軒)・4B(3軒)・4C(1軒)、6A(1軒)の6軒、西支群には4C(1軒)・4D(2軒)、6C(1軒)の4軒、北

支群には4B(2軒)、4C(2軒)、6A(1軒)、6D(3軒)、6E(1軒)の9軒がある。全体的には4本類型(4A・4B・4C・4D)13軒、6本類型(6A・6C・6D・6E)7軒で、4本類型が約2/3を占め、4A～4D類型が出揃うとともに、6本類型も6B類型を除き各類型がほぼ揃った形となる。4B・4C類型を主体とする4本類型が西・南支群(B区)に8軒、北支群には4軒と、南・西支群に多い。また6本類型は南・西支群に2軒、北支群に5軒と北支群に偏りをみせている。規模の大きい6D・6E類型が北支群(D区)に多い傾向は明瞭で、南支群と北支群の竪穴住居の規模、設計仕様に差異が存在するといえるが、これは第2期からの傾向ともいえよう。

第4期には、南支群に4A(1軒)、西支群に4A(1軒)、4C(1軒)、北支群に4A(1軒)、4C(1軒)、4E(2軒)、6D(1軒)、6E(1軒)がある。4本類型は南・西支群に3軒、北支群に4軒と7軒存在するのに対し、6本類型は北支群に2軒のみとなり、4本類型が主体的で、6本類型は減少化が著しい。4本類型には4A・4C・4Eの3種類の3サイズが存在し、小～中形の4A・4C類型が南・西支群にあり、4本類型でも最大形の4E類型は北支群に2軒分布する。また大形の6D・6E類型2軒がいずれも北支群に分布することから、北支群は第4期においても大形サイズの竪穴住居が分布する傾向を示し、ここでも南・西支群と北支群の対比が明瞭である。

このように増野新切遺跡では竪穴住居が類型別に群在し、いくつかの種類の組合せにより支群を構成する傾向がある。4本類型では北・西・南支群がおおむね均等に軒数を有し、4A・4C類型はそれぞれの群に存在するほか、北支群には4E、西支群には4D、北・南支群には4Bが存在し、北支群では4A・4B・4C・4Eの4類型、西支群では4A・4C・4D類型、南支群では4A・4B・4C類型が各支群内で比較的好くまとまっているのがわかる。

6本類型では、北支群に集落の内側から外側に向かうように6E、6D、6Aが重帯的に占地し、小さなサイズの竪穴住居が集落の外側に、大きなサイズが集落の内側に分布する傾向がある。さらに北支

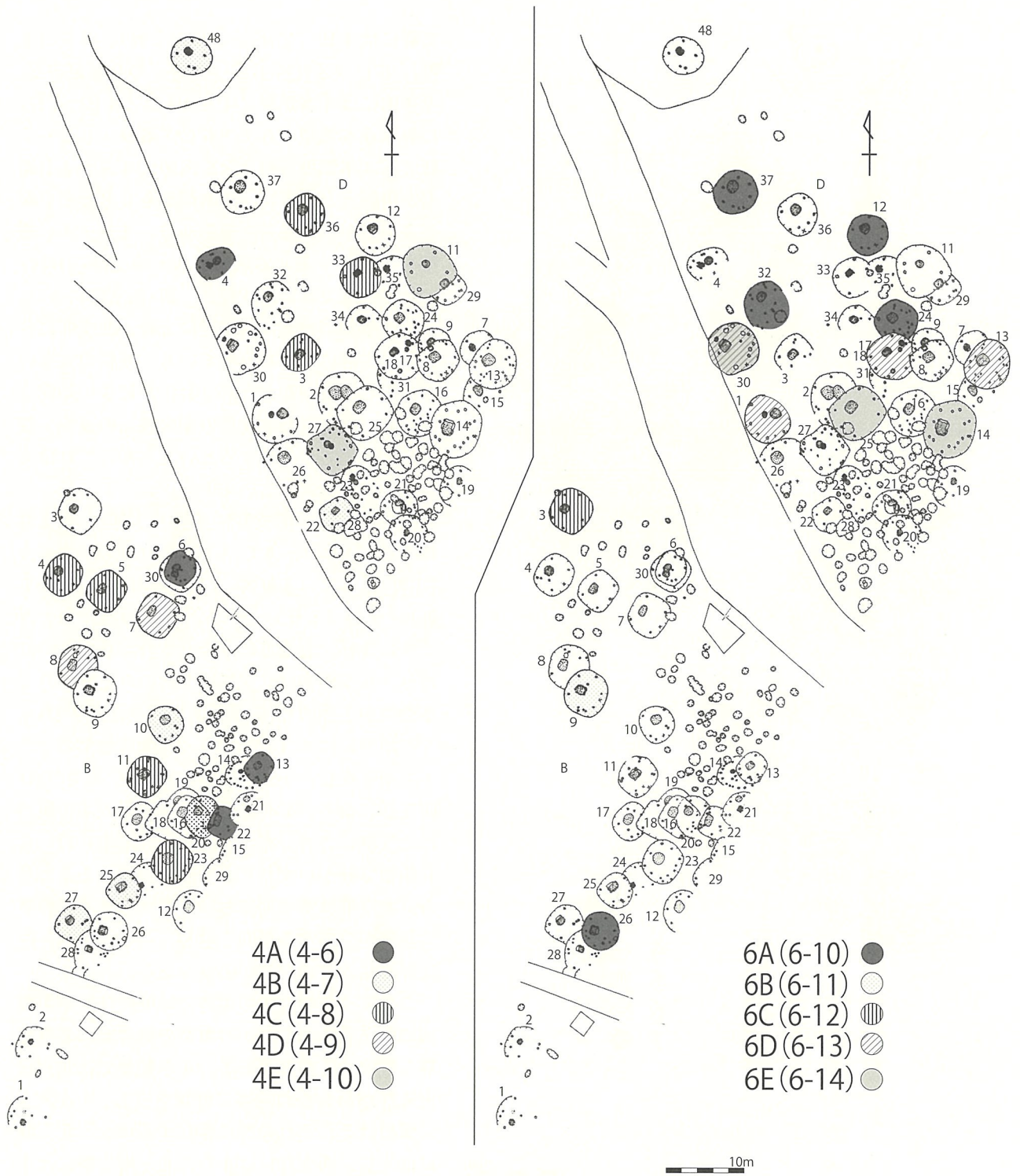


図9 4・6本柱穴類型のサイズ分布

群が東側と西側の2群に分かれるように見える。また南支群には6Aのみが存在し、西支群には6B・6Cがある。このように北支群に6本類型の竪穴住居が集中し、西・南支群の軒数を大きく凌駕するとともに、北支群では3類型が構造的に配置する。

各類型の時期的な系譜性をみると、増野新切遺跡

全体で6A類型は第2～3期、4C・6E類型は第2～4期、4A・4B・6D類型は第3～4期の系譜性があり、そのほか6B類型は第2期のみ、4D・6C類型は第3期のみ、4E類型は第4期のみに存続する。さらに支群ごとにみると、4A類型では南支群で第2～3期、4C類型では南支群で第2～3

表1 各類型の時期変遷

		4本				5本		6本				8本		
		4A	4B	4C	4D	4E	5A	5B	6A	6B	6C	6D	6E	8
第2期	南			B11					B26					
	西									B9				
	北								D12・ D24・ D37	D14a			D14	D26
第3期	南	B13	B10・B 20・B 25・B27					D24	B23					
	西			B4	B7・B8						B3			
	北		D22・D 48	D3・D 36			D8		D32a			D1・D 13・D30	D30b	
第4期	南	B21												
	西	B6		B5										
	北	D4		D33		D17・D 27						D17	D25	

期、西・北支群で第3～4期、6A類型では南・北支群で第2～3期、6D類型の北支群で第3～4期、6E類型の北支群で第2～4期にかけて支群ごとに各類型の系譜性が認められる。このように第2～3期に系譜をもつ前葉型と、第3～4期に系譜をもつ後葉型に大別でき、前葉型に6本類型、後葉型に4本類型が多く、支群ごとに類型の系譜性が認められる。ただし、6本類型から4本類型へと単純に交代・変遷したのではなく、第4期であってもより大形のサイズには6本類型の設計仕様を採用し、小～中サイズには4本類型を採用するという選択性がうかがえるとともに、第2期以来6本類型を主体とする北支群では第4期まで6本類型が残ることから、6本類型の設計仕様は中期後半を通して存続している。

ここでは堅穴類型の分布にサイズの違いがあり、南支群には4本類型を主とした小形、北支群には6本類型を主とした大形のサイズが分布する傾向にあることをまず確認しておきたい。堅穴住居の大きさ、サイズの選択が何に基づくものであるのかは明らかではないが、1軒あたりの居住人数、家族構成に由

来するであろう。一支群内の堅穴住居が系譜性を持ち、より血縁的な集団であったと仮定すると、例えば小形のサイズを主とする南支群は最小単位としての夫婦、あるいは夫婦と子どもからなる家族構成を想定でき、北支群の大形のサイズでは2～3世代からなる多人数の家族構成を想起させ、両者間には社会的差異が生じていたと考えられる。残念ながら堅穴住居の構造や付属施設、出土遺物からそうした根拠を見出すことができていないが、例えば北支群にはD8号住、D30号住の奥壁部には石囲いの祭壇を持ち、北支群が祭祀的な優位性を有していた可能性を示している。中期後半では、環状集落を呈する集落で北支群の堅穴住居に大形サイズが分布する事例があり、多摩ニュータウンNo.939遺跡などを類例としてあげることができる。集落全体を見下ろすような位置にあたる支群に集落を統括するような集団が占めていた可能性があり、後期に顕在化するムラ長立場の核家屋出現へとつながるものとみられる。

まとめ

増野新切遺跡では竪穴住居を主柱穴本数で分類し、さらに重ね合せ法による主柱配置で竪穴サイズを勘案しながら検討すると、4本類型で5サイズ、6本類型で5サイズ、計10サイズの1倍尺違いの柱穴配置が認識可能であった。また平面プランは柱穴配置から2倍尺分の外周を加えた、縦軸長で4倍尺分、横軸長・中軸長で4倍尺分加えた長さとし、これもまた基準尺を用いた設計仕様の可能性がある。筆者は、身体尺のうちの肘長をもとにした基準尺を用い、設計仕様をイメージしながら柱穴配置を決めたと考えるが、設計仕様は原理的、理念的なモデルといえ、実際の柱穴配置はそれぞれ微妙に歪んだものとなっている。つまり理想化されたモデル、設計仕様は範型（理想形）、個々の竪穴住居は実体形（具体形）である。実体形間には微妙な差異をもつが、モデルとされた範型は同じであり、個々の竪穴住居は類型として分類、説明することが可能となる。

集落内での各類型の分布状況、変遷をみると、増野新切遺跡では北支群に6本類型を中心に比較的大形のサイズが分布し、西・南支群には4本類型を中心とした比較的小形のサイズが分布することから、北支群の社会的優位性がうかがえる。各支群には同一類型、同サイズの竪穴住居が近い位置に分布し、連続的な時期差として捉えられる傾向にあることから、住まいの動きを示す現象とみられる。具体的には上屋材の転用・移設を意味するもので、検証は難しいが、同じ血縁による系譜性を推定できる。また各支群は複数類型で構成される例があり、数軒の異なる竪穴類型が寄り集まった単位（支群）を認めることができる。

以上を整理して以下のようにまとめておく。

- (1) 縄文中期後半の増野新切遺跡には4～8本主柱の竪穴類型が存在し、4・6本主柱類型設計仕様に基づく基準尺の倍尺値の違いによりそれぞれ5サイズを有している。
- (2) 設計仕様は範型、モデルであり、それをもとに構築された実体形にはさまざまな差異を生じている。増野新切遺跡では約40cmの基準尺を当てはめることができる。
- (3) 各類型の分布をもとに集落構造を検討すると、支群のまとまりに複数類型の組合せからなるセット構造を見出すことができる。
- (4) 増野新切遺跡の中で北側に大形、南側に小形の竪穴住居が分布する傾向があり、集落の中で位置的に高い北側が社会的優位性を持っていた可能性がある。

参考文献

- 石井寛 2004「まとめと考察」『高山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告35 横浜市ふるさと歴史財団
- 榭原功一 2015「竪穴住居における縄文尺の検討」『縄文時代』26 縄文時代文化研究会
- 榭原功一 2016a「住居型式と集落形成」『考古学の地平Ⅰ—縄文社会を集落から読み解く—』小林謙一・黒尾和久・中山真治・山本典幸編 六一書房
- 榭原功一 2016b「縄文集落の構造—静岡県桜畑上遺跡の検討—」『山梨県考古学協会誌』24
- 長野教育委員会・日本道路公団 1973「増野新切遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内その2—』
- 長谷川豊 1994「唐草文土器分布圏における竪穴住居址の一類型」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』
- 長谷川豊 1995a「飛騨における縄文中期後葉の竪穴住居址について」『飛騨と考古学』
- 長谷川豊 1995b「縄文時代中期における竪穴住居址の一類型」『古代文化』47-6
- 長谷川豊 2000「伊那谷に分布する縄文時代中期後葉の「円形5本主柱型竪穴住居址」について」『静岡県考古学研究』32
- 長谷川豊 2007「峠を越えて伝えられた竪穴住居の設計仕様—縄文時代中期における長野県の事例—」『古代文化』59-1
- 長谷川豊 2014「長野県立石遺跡における縄文時代中期後葉集落の構成—竪穴住居設計仕様からの検討」『史峰』42 新進考古学同人会
- 長谷川豊 2016「長野県清水遺跡における縄文時代中期後葉の構成—竪穴住居設計仕様からの検討—」『史峰』44 新進考古学同人会
- 八木光則 1976a「縄文中期集落の素描(1)—信濃伊那谷における集落共同体をめぐって—」『長野県考古学会誌』25
- 八木光則 1976b「縄文中期集落の素描(2)—信濃伊那谷における集落共同体をめぐって—」『長野県考古学会誌』26